

「上田家の足跡」からみる地域の発展 ～2025 年度企画展示第 2 章追加調査～

札幌市総務局行政部公文書館専門員
得能 紗恵
中尾 友香

はじめに

札幌市公文書館（以下、「当館」という。）では 2025 年度企画展示として、令和 8（2026）年 2 月 2～6 日に札幌市役所 1 階ロビーにて『上田家の足跡～特定重要公文書「上田善七資料」を中心に～』を開催した。企画展示は、明治 4 年に円山に家族と共に入植し地域の発展に尽くした上田善七とその兄・子など上田家の人々の活動を 1 章「上田家の来道と発展」、2 章「地域の発展と上田家」、3 章「上田家と教育」、4 章「上田家の社会貢献活動」の 4 章構成で、特定重要公文書¹『上田善七資料』²を中心とした当館所蔵資料から見ていった。本稿では、企画展示の 2 章についてそれぞれの節の担当者が展示で取り上げた内容について追加調査を行い論ずる。なお、資料中の旧字旧仮名遣いを引用する際に新字新仮名遣いに置き換える場合がある。本稿は、はじめに・1 章を得能が、2 章・おわりにを中尾が担当した。

1 円山地域の発展

1.1 はじめに

企画展示の 2 章は「地域の発展と上田家」と題し、1 節では円山の略年表と上田家の人々がどのような役職につき円山地域に関わっていたのかを見ていき、2 節ではその中から上田家に関わった事業を取り上げて紹介した。上田家の足跡をたどるという展示の主旨のもと、上田家に関するを中心に構成したが、本章では地域の発展そのものに焦点を当てる。

まず、展示パネルに掲載した略年表から円山地域の自治体としての変遷を抜粋したものが【表 1-1】³である。明治 3（1870）年に開村し、合併や町制施行等を経て開村から 71 年後の昭和 16（1941）年 4 月 1 日に札幌市と合併した。本章では、当館所蔵の特定重要公文書や新聞記事を主に使用しながら、藻岩村が円山町となり札幌市と合併するまでの期間について見ていく。

【表 1-1】 円山略年表抜粋

年	事項
明治3（1870）	庚午三の村 開村
明治4（1871）	円山村に改名
明治39（1906）	山鼻村と合併し藻岩村となる
昭和13（1938）	円山町となる
昭和16（1941）	札幌市と合併

1.2 藻岩村の町制施行

明治 39（1906）年に円山村と山鼻村が合併し誕生した藻岩村は、昭和 13（1938）年に町制施行し円山町となった。その際の文書が綴られている資料として当館所蔵特定重要公文書『昭和 13 年度 許可認可関係書類綴 円山町』⁴がある。本節ではこの簿冊を中心に町制施行の過程について確認する。

町制施行にあたって藻岩村は北海道庁に対して申請を行っており、添付資料として町制施行の際の理由書⁵がある。まずは町制施行を行った理由から見ていく。理由書は「本村は札幌市に接続し逐年同市の膨張に伴い本村の発達著しきものあり」からはじまり、内容は次の通りである。1 km²あたり 341 人強の人口密度を有し、官幣大社札幌神社（現：北海道神宮）が鎮座しているので参詣人は常に絶えず、特に桜花の季節は賑わっていること、冬はスキー地

¹ 公文書管理法第 2 条にいう「特定歴史公文書等」に相当する、本市での呼称。「札幌市公文書管理条例」第 2 条（5）で規定されている。

² 簿冊コード：2016-0535

³ 円山百年史編纂委員会、『円山百年史』、1977 年（当館所蔵図書、No.3388）をもとに作成

⁴ 簿冊コード：2013-0653

⁵ 同上

としても著名であること、交通機関は電車線⁶が市街中央を通り、バスも各所を往来していたため交通がとても便利であること、規模の大きな蔬菜市場があり藻岩村内は勿論、札幌市内からの顧客もあり四季を通して常に盛況している、といったことが書かれている。この理由書からは藻岩村の発展ぶりをうかがうことができ、更なる地域の発展のため町制施行をしたいという主旨であることがわかった。

次に、この町制施行の理由書は以下のように続いている。

現在本村の名称は藻岩村と称し来り候も単に二級町村制施行の際山鼻併合の場合斯の名称を採用したるも元来斯の字名もなく又村名もなく単に山名あるのみ却って円山村は明治3年来歴史的村名にして現在村構成の主体も円山にして今日に於いては藻岩村として通ずるなく一般円山村と称せられ居候

この文書から、円山村のほうが藻岩村よりも歴史的な名前であり一般に通じる点を理由に、町制施行と併せて名称変更も願い出ていることがわかる。

また、名称変更の理由について詳しく書かれた文書「円山町の名称に就て」⁷がある。理由の大意としては同じではあるが、「一般的には明治四年創設以来の地名たる円山村と呼称しあらゆる公私立営造物又は団体名に於ても藻岩なる名称を冠したるものは農会の名を除く外他に全く無く」、「藻岩村なる地名を知悉せざるもの多く殆ど行政関係にのみ呼称せられ社会的俗称としては円山村と称えざれば一般に通せざる実状」などこちらの文書ではより明確な主張がされていた。このように、藻岩の名称は知名度が低かったことが推察される。

実際にはどれほど藻岩の名称は使われていなかったのか。同簿冊に藻岩村内の施設や団体が掲載されている北海道庁への申請の際の添付資料が綴られている。その中から藻岩または円山が名称に含まれる施設等を抽出したものが【表 1-2】⁸である。45 施設・団体が掲載されていたなかで、藻岩または円山が含まれていた施設等は 23 あった。そのうち藻岩とつく施設等は 5 つで、理由書にもあった農会と行政機関である役場のほか若干数みられるが、全体の 1 割程度とあまり多くはないことが確認できた。

山鼻村との合併前の円山村時代から存在する施設等もあるが、藻岩村になってから組織された施設等もある。中でも、円山消防組は大正 4 (1915) 年に組織され所在地も藻岩村役場の隣であるが、円山と称していることに円山という名称へのこだわりが見えるように思う。このほか表には含まれていないが、円山朝市、円山公園など藻岩村民以外からのアクセスが多い場所が円山の名称であることも藻岩よりも、円山のほうが一般的であることの一因となっていたのではないだろうか。

【表 1-2】 藻岩村の団体及び施設

官公署	工場
藻岩村役場	北海道水力電気株式会社藻岩発電所
円山郵便局	白洋舎札幌支店 円山洗濯工場
円山北一条郵便局	警備
社寺宗教	円山消防組
大谷派札幌別院 円山説教所	円山火災予防組合
天理教 藻岩村宣教所	産業団体
日本基督教 円山伝道所	藻岩村農村会
円山天主公会	保証責任 円山信用購買販売組合
教育機関	藻岩村蔬菜生産組合
円山尋常高等小学校	市場
円山第二尋常小学校	藻岩村蔬菜生産組合 円山卸売市場
円山青年学校	藻岩村蔬菜生産組合 円山小売市場
私立 円山幼稚園	円山第一小売市場
※藻岩村蔬菜生産組合の市場については団体名称に含まれる藻岩はカウントしていない	円山中央小売市場
	円山南三条小売市場

⁶ 大正 10 (1921) 年に路面電車一条線が西 15 丁目から西 17 丁目まで延長し円山線が開通。大正 13 (1924) 年には円山公園まで延長した。昭和 48 (1973) 年に札幌市営地下鉄東西線の着工に伴い円山線は廃止された。

⁷ 前掲『昭和 13 年度 許可認可関係書類綴 円山町』

⁸ 同上をもとに作成

昭和 13 年 4 月 1 日に北海道庁より町制施行並びに名称変更の許可が下り、4 月 15 日に施行され円山町となった。この名称変更により自治体の名称としては約 30 年ぶりに円山の名がついた。当日の新聞では 1 頁全て円山町に関する特集が 2 紙【図 1-1】⁹【図 1-2】¹⁰で組まれたほか、町制施行を祝した広告【図 1-3】¹¹が掲載されるなど大きく取り上げられた。また、約 3,500 人が歌いながら円山公園から町内をめぐり札幌神社に向かった祝賀行列があり、札幌神社では町昇格奉告祭があった。円山小学校では 350 人余りが集まり祝賀会【図 1-4】¹²が行われるなど様々な祝賀行事が催され、村民待望の円山町が誕生した。



【図 1-1】



【図 1-2】



【図 1-3】



【図 1-4】祝賀会の様子

1.3 札幌市との合併

円山に町制が施行され、次の円山地域における大きな出来事は札幌市との合併である。この合併についてまとめられた、当館所蔵特定重要公文書『昭和 15 年 4 月 札幌市・円山町合併関係書類綴 円山町』¹³、『昭和 16 年 円山町合併関係』¹⁴の 2 簿冊と当時の新聞記事を中心に円山町と札幌市の合併について確認する。

円山町と札幌市は昭和 16 年 4 月 1 日に合併した。町制施行から 3 年後のことであったが、町制施行以前から藻岩村と札幌市の合併については話が上がっていた。いつ頃からその計画があったのかをまずは見ていく。昭和 4 (1929) 年 2 月 26 日の北海タイムスの記事に「五十年後には人口五十万の大札幌市」¹⁵とある。札幌市が 50 年後人口 50 万人を抱える都市計画で付近 5 町村を含めた区域での計画が想定されていた。この 5 町村とはどこを指すのか。大正 15 (1926) 年の札幌市議会において札幌都市計画区域は札幌市域のほか、豊平町・白石村・札幌村・琴似村・藻岩村各町村の一部と定められた。【図 1-5】¹⁶は昭和 2 (1927) 年に作成された「札幌都市計画区域図」である。青の太線内が当時の札幌市域であり、赤の太線が札幌市の都市計画区域、つまり札幌市が区域編入を検討している周辺町村を表している。

藻岩村は大字円山村・山鼻村のほとんどが計画区域内であることが確認できる。札幌市はこの時点で藻岩村市街地の編入を検討していたと考えられる。藻岩村の中核である地域が札幌市編入となれば藻岩村との合併も視野に入っていたのではないだろうか。

⁹ 『北海タイムス』昭和 13 年 4 月 15 日

¹⁰ 『小樽新聞』昭和 13 年 4 月 15 日

¹¹ 『北海タイムス』昭和 13 年 4 月 15 日

¹² 「躍進まるやま元服の喜び」『北海タイムス』昭和 13 年 4 月 16 日

¹³ 簿冊コード：2013-0261

¹⁴ 簿冊コード：2013-0251

¹⁵ 「五十年後には人口五十万の大札幌市」『北海タイムス』昭和 4 年 2 月 26 日

¹⁶ 札幌市公文書館所蔵特定重要公文書『自大正 14 年至昭和 8 年 隣接町村合併関係 参考第 5 号 総務部庶務課』（簿冊コード：2013-0476）

昭和 10 (1935) 年には、札幌市が市議会の議決により臨時市域変更調査委員会を設置したこともあり、新聞紙面で度々合併の話題が上がっている。札幌市が接統町村を合併し大札幌市を建設するという計画で札幌市が藻岩・豊平・白石との交渉を始めたという記事¹⁷もある。一方で藻岩村は、昭和 10 年 12 月 11 日の『北海タイムス』に「実現は不可能……と札幌市併合を見送った藻岩村 機運の進展に吃驚」¹⁸との記事があり、藻岩村では合併の計画委員会の会合も行われておらず札幌市との合併に向けた動きはまだなかった。しかし、その後も合併に向けた機運は高まり「来年は幌都に合併か」¹⁹、「オリンピック²⁰を機に藻岩、市に編入か」²¹との記事が掲載されていた。

また、昭和 13 年の町制施行時には石狩支庁から藻岩村に照会があり²²、以前より札幌との合併の話があるが、①現在の経過、②町制施行による合併への影響や障害、の 2 点を調査し回答してほしいとの内容であった。これに対し藻岩村は、①両者間において正式の交渉はなくそれぞれが内部的に調査を行っている状況であるが、合併の可能性はある、②町制施行は村の資格を上げるためであり独立の為ではなく、むしろ昇格によって合併は円滑に進むと考えている、と回答している。

同年札幌市では臨時市域変更調査委員会が開かれ、豊平町・円山町・琴似村・札幌村・白石村のうち、協議の結果多数委員の希望により円山町との合併を促進することが決定された。この決定以降、両者間での意見交換が行われた。昭和 15 (1940) 年 4 月 1 日付札幌市から円山町宛の文書「市町合併ニ関スル件」²³では、「皇紀二千六百年²⁴記念事業ノートシテ大札幌都市計画の確立ノ議モ起リ居リ此際取急調査ヲ進メ度ト存第一ニ当市及貴町会議員ヲ代表スル委員ノ間ニ懇談会開催致シ度希望致候」とある。この文書を受けて 4 月 8 日、円山町も合併調査委員会を設置し、17 日には両市町の合併調査委員による懇談会も実施された。これにより合併問題は大きく前進し、皇紀 2600 年事業の一つとして急速に合併についての話し合いが進んだ。

6 月には具体的な交渉も始まり、合併に際した円山町の希望条件等の話し合いが行われた。円山町の希望条件の一つとして、円山町全域の札幌市への編入が含まれている。前掲【図 1-5】では大字円山村・山鼻村以外は都市計画区域から外れていたため、その部分も含めての合併を、ということであろう。

11 月 1 日の市町合同委員会において、昭和 16 年 4 月 1 日の合併実現に委員全員が賛成し、28 日の同委員会にて、市議会・町議会で昭和 15 年中に決議し皇紀 2600 年の記念とし、実施



【図 1-5】札幌都市計画区域図 (筆者加筆)

¹⁷ 「隣接町村の合併、外交交渉を」『北海タイムス』昭和 10 年 10 月 13 日

¹⁸ 「実現は不可能…と、札幌市併合を見送った藻岩村」『北海タイムス』昭和 10 年 12 月 11 日

¹⁹ 「嫁入り前の藻岩村、来年は幌都に合併か」『北海タイムス』昭和 11 年 11 月 18 日

²⁰ 昭和 15 (1940) 年、札幌にて開催予定であった第 5 回冬季オリンピック大会。日中戦争の影響により開催地を返上した幻のオリンピック。円山地域では円山総合運動場が会場候補地となっていた。

²¹ 「オリンピックを機に藻岩、市に編入か、併合問題また、抬頭」『北海タイムス』昭和 12 年 6 月 24 日

²² 前掲『昭和 13 年度 許可認可関係書類綴 円山町』

²³ 前掲『昭和 15 年 4 月 札幌市・円山町合併関係書類綴 円山町』

²⁴ 『日本書紀』に記された神武天皇即位の年を元年として定められた紀元。西暦紀元前 660 年が皇紀元年にあたり、昭和 15 年で皇紀 2600 年にあたる。

は昭和 16 年 4 月 1 日とすることが決定した。12 月 13 日には市議会及び町議会が開催され諮問にかけられた。札幌市議会では反対意見もなく、満場一致で可決された。一方円山町議会では、反対意見や合併時期の延長意見等、議論が白熱した。円山町内では合併反対の動きもあり、60 名ほどの署名が集められた合併反対の陳情や、合併反対議員による演説なども行われていた。反対の理由としては、合併により税負担が増える懸念がある、円山町が発展している今あえて合併する必要があるのか、などが挙げられている。結局 13 日中に議論はまともらず散会となり、16 日に再開され長時間の議論の末、賛成 17 反対 6 の賛成多数により可決された。

その後、翌 16 年 2 月に道庁・内務省からそれぞれ決裁がおり実施が確実なものとなり、3 月 25 日内務省より認可され、4 月 1 日に円山町と札幌市は合併した【図 1-6】²⁵。この合併により札幌市は、円山町の人口約 16,000 人を加え約 220,000 人となった。面積は札幌市 29.274 km²、円山町 46.980 km²、合計 76.254 km²となり、札幌市の面積は約 2.6 倍にも増加した。これにより、札幌市の都市計画である大札幌建設は大きく前進した【図 1-7】²⁶。

円山町が合併の希望として出した条件等は最終的に「札幌市ニ円山町合併ニ関スル覚書」²⁷としてまとめられた。その内容は「札幌市ト円山町合併ノ上ハ市ハ左記事項ノ実現に努ムモノトス」として 17 項目が挙げられている。主な内容としては大きく分けて①町内道路新設及び改良、②側溝下水道の改良、③学校改築、④消防力の拡充、⑤町吏員の全面吸収と恩給継続、⑥市議補選の実施、の 6 点であった²⁸。特記するほどの新規事業はなく、経常的な環境整備工事がほとんどとなった。この頃は統制経済も厳しくなり物資の配給等においても支庁管轄下の郡部町村であるよりも札幌市のほうが便利であること等が円山町にとって合併の利点であった²⁹。

市町合併に伴い関連行事がいくつか開催された。円山町は 3 月 31 日 10 時札幌神社にて解町奉告祭を行い、11 時から円山小学校にて解町式が執り行われた。解町式では町の功労者 97 名に感謝状が贈られ、明治 3 年の開村から 70 年の歴史に幕を閉じた。翌日 4 月 1 日、10 時には合併に伴う関係議案審議のため第 3 回市議会が開催され、円山出張所の設置などがここで決議された。13 時には札幌神社にて合併奉告祭、17 時には豊平館にて祝賀懇親会が行われた（【図 1-7】の写真は懇親会の様子）。合併から 3 か月後の 7 月 3 日には札幌市公会堂において円山町合併記念祝賀会が行われ、市関係公職者等 600 名余りが招待され盛大に祝われた【図 1-8】³⁰。



【図 1-6】合併前夜の円山町



【図 1-7】



【図 1-8】

²⁵ 「あす晴れて円山の嫁入り殖える人口一万六千山まで持つ大都札幌」『北海タイムス』昭和 16 年 3 月 31 日

²⁶ 「大札幌スタートの日、札幌市会市議選挙五月執行豫定」『北海タイムス』昭和 16 年 4 月 1 日

²⁷ 前掲『昭和 16 年 円山町合併関係』

²⁸ 札幌市議会、『第 5・6 期 札幌市会小史』、1980 年（当館所蔵行政資料、No.11284）

²⁹ 前掲『円山百年史』

³⁰ 『北海タイムス』昭和 16 年 7 月 3 日

1.4 おわりに

本章では昨年度作成したパネル展示では追求しきれなかった部分の内、円山地域の町制施行から札幌市と合併するまでの期間に絞り追加調査を行った。本章では展示で取り上げた上田家の人々は登場していないが、この時期においても上田家の人々は円山地域の有力者として活躍していた。例えば、札幌市との合併にあたり調査委員を務めたのは万平の長男、2代目万平であった。また、合併反対派の町議の中には万平の三男、勝三郎もいた。さらに、善七の長男、守蔵も町議に名を連ねている。自治体としての円山地域の変遷に焦点を当て調査を行ったが、資料には度々上田家の人々が登場し、円山の発展を語るにおいて欠かすことのできない人々であると改めて認識した。

(得能 紗恵)

2 明治期の物産共進会からみる札幌の発展

2.1 はじめに

パネル展示の2章3節では、円山の所在地にある札幌神社の社格昇格や新社殿の造設までの上田家の関わりについて紹介し、4節では上田善七が地方委員を委嘱された物産共進会の様子や寄付を行った大正2(1913)年の凶作について取り上げた。本章では北海道物産共進会を中心に明治期の博覧会や札幌の発展に焦点を当てて論じる。

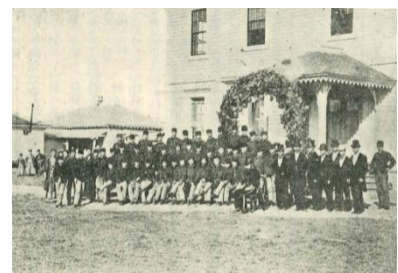
2.2 物産共進会の沿革と明治期における博覧会について

物産共進会とは産業の育成を図るため、各地方の代表的な物産や技術を一堂に集めて展示し、その優劣を品評する会である。北海道における物産共進会は、札幌農学校教授ブルックスにより提唱され³¹、明治11(1878)年10月に札幌(大通西3丁目)で開催された「第一回農業博覧会【図2-1】」³²が始まりである。10月16日に開業式が行われているが、同日は札幌農学校演武場(現:札幌市時計台)の開業式【図2-2】³³も行われ、黒田清隆開拓長官、調所広丈農学校校長も臨席し、5千から6千人もの人が集まったとされる³⁴。第1回の出品内容は、札幌本庁管内および七重試験場³⁵の産出物に限定された。馬、牛、鶏、豚等の動物、農業機械、大根や人参、芋、大麦、小麦、大豆、小豆等の農作物が出品され、出品総数は官民合わせて763点、優等者として褒章された者は一等から三等まで合わせて148人だった。開催に際して建築委員、出品受付及陳列委員、会計検査委員等が任命され、委員には開拓使や農学校教員、農学校の学生も加わった³⁶。



【図2-1】第一回農業博覧会

【表2-1】³⁷に見られるように農業博覧会は翌年函館で開催され、明治15(1882)年まで札幌と函館の隔年交代で開催された。明治13(1880)年の農業博覧会では、山鼻学校(現:札幌市立山鼻小学校)の生徒が実習生産した野菜が特賞を、繭が一等賞を受け、また余市のりんごが出品され人目を



【図2-2】演武場の竣工式

³¹ 北海道帝国大学、『北海道帝国大学沿革史創基五十周年記念』、1926年(当館所蔵図書、No.2642)77-78頁。

³² 札幌区役所、『札幌区史』、1911年(当館所蔵図書、No.19196)

³³ 札幌市教育委員会、『明治天皇聖蹟時計台建物修築記念誌』、1933年(当館所蔵図書、No.865)7頁。

³⁴ 『函館新聞』明治11年10月24日、『新聞史料【函館新聞】明治11年7月～明治17年11月(新聞スクラップ)』、(当館所蔵図書、No.61234)

³⁵ 外国で購入した家畜や農作物の種は北海道に移す前に風土に適しているか東京の官園で試され、その後七重試験場に移された。北海道、『新北海道史第三巻通説二』(1971年、当館所蔵図書、No.762)616-617頁。

³⁶ 北海道大学、『北大百年史札幌農学校史料(一)』、1981年(当館所蔵図書、No.7203)371-372頁。

³⁷ 北海道、『拓地殖民要録』、1906年、199-203頁より作成

引いたという³⁸。

明治 15 年は農業仮博覧会に合わせて農話会が開催され、勸農協会側から中山久蔵・早山清太郎ら農家 15 名、札幌農学校出身の勸農課員新渡戸稲造・町村金弥ら 20 名が出席し討論を行っている。その中の一項「農家常食の種類」では、米作の推奨を求める農家と北海道の気候は米の作育に適さないため、玉蜀黍麦類等他の道産の穀物を常食とし、米の輸入を防ごうという非米食論者との間で、激論が交わされたという³⁹。

博覧会・共進会は、販路の拡張⁴⁰や技術普及の手段として重要視されており、明治 15 年に開拓使が廃止された後もその流れは変わらなかった。明治 16 (1883) 年には、農・工・商・漁を問わず本道の産物を出品するものとして、北海道物産共進会と改称され、根室も開催地に加わった。明治 25 (1892) 年札幌で開催された共進会から暫く開催は見送られ、その間小規模の品評会、畜産、工業等の専門的な共進会は幾度となく開催されたが、全道各種の生産品を網羅した共進会は明治 39 (1906) 年まで開催されなかった。

明治 4 (1871) 年から 6 (1873) 年にかけて岩倉使節団がアメリカ、ヨーロッパ諸国に派遣され、その記録は随行した久米邦武によって『特命全権大使米欧回覧実記』としてあらわされている。その中で農業博覧会は「産業を振興し進歩を促す肝要の組織」とされ、「博覧会で陳列品の選考を行い、褒賞を出し、農作物の病気や欠陥などについて専門の新聞で報道し、また農民や牧畜業者のうち、特にすぐれたものを表彰することは国益の増大に役立つことが多い」と記されている⁴¹。慶応 3 (1867) 年の大政奉還から明治 19 (1886) 年の公文式になるまでの太政官布告等の法令において「博覧会」という言葉が含まれるものは 300 件ほどあり⁴²、その中には明治政府が初めて公式に参加したウィーン万国博覧会に関するものも含まれている。明治 6 年に開催されたウィーン万国博覧会で、日本は織物、陶磁器等の美術工芸品や金の鯨を展示し、多くの出品物が賞を受け、設営された日本庭園も高く評価されたが、実際に博覧会場を見た久米邦武は、「趣向が異なっており、西洋の人々の目に珍しく映るからだろう」として「ヨーロッパの技術を参考にして工夫を重ねると有力な国産品」になると指摘している⁴³。ウィーン万博に派遣された津田仙（元開拓使嘱託）は、オランダの農学者から西洋の技術を学び、その内容を編述、翻訳した『農業三事』を出版した⁴⁴。

明治 10 (1877) 年 8 月に東京上野で開催された第一回内国勸業博覧会【図 2-3】⁴⁵は、

【表 2-1】北海道物産共進会の沿革

	開催年	名称	開催地
1	明治11年10月	第一回農業仮博覧会	札幌
2	明治12年10月	第一回農業仮博覧会	函館
3	明治13年10月	第二回農業仮博覧会	札幌
4	明治14年10月	第二回農業仮博覧会	函館
5	明治15年10月	第三回農業仮博覧会	札幌
6	明治16年10月	北海道物産共進会	函館
7	明治17年10月	北海道物産共進会	札幌
8	明治18年11月	北海道物産共進会	根室
9	明治19年10月	北海道物産共進会	函館
10	明治20年7月～8月	北海道物産共進会	札幌
11	明治25年8月	北海道物産共進会	札幌



【図 2-3】第一回内国勸業博覧会

³⁸ 明治 8 年、開拓使により配布されたりんごの苗から結実した。その後、19 号が「緋の衣」49 号が「国光」と名付けられた。余市町、『年表余市小史』、1969 年、24、43-44 頁。

³⁹ 開拓使はケプロンらの主食は米から小麦に変えるべきという意見に従い、札幌農学校もパン食が常食だった。しかし、長年の食慣習を変えることは容易ではなく、米作も年々増加していった。早山清太郎、中山久蔵は本道米作の率先者である。北海道、『新北海道史第三巻通説二』、1971 年、(当館所蔵図書、No.762) 992-995 頁。

⁴⁰ 明治初期は農家の割合に対して市街住民は少なく、収穫物の消費は札幌付近だけでは難しく、遠方の移出にも輸送手段は整っていなかった。明治 10 年、開拓使は常備倉を設け、内国博覧会への出品や東京に物産売捌所を設け販路の拡張につとめた。札幌市、『札幌市史産業経済編』、1958 年(当館所蔵図書 No.769)、11-12 頁。

⁴¹ 久米邦武『現代語訳特命全権大使米欧回覧実記第 2 巻』、2005 年、慶応義塾大学出版会、432-433 頁。

⁴² 明治 18 年 12 月、内閣制が発足し、太政官制度が廃止された。日本法令索引〔明治前期編〕

(<https://dajokan.ndl.go.jp/#/>、2026 年 4 月 10 日閲覧)

⁴³ 久米邦武『現代語訳特命全権大使米欧回覧実記第 5 巻(下)』、2005 年、慶応義塾大学出版会、28-29 頁。

⁴⁴ 都田豊三郎『津田仙 明治の基督者』、2000 年、株式会社大空社、40-41、51-54 頁。

⁴⁵ 東京都立中央図書館「東京名所之内」「明治十年上野公園地内国勸業博覧会開場之図」(請求記号 803-C11/東 C803-C011)

岩倉使節団において副使であった内務卿大久保利通が提唱して開催されたもので、その様子は東京帝国大学の教授エドワード・S・モースによると、測量用品、外国の衣服、靴や鞆、帽子、椅子等の家具、石鹼、マッチ、機械、農業器具等が陳列され、「維新から、まだ僅かな年数しか経ていないので、博覧会を見て歩いた私は、日本人がつい先頃まで輸入していた品物を、製造しつつある進歩に驚いた。」と記されている⁴⁶。第一回内国勸業博覧会は、各地から収集された出品数8万4千点余り(鉱業及び冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸に分類)、入場者数454,168人という大規模なもので、美術本館、農業館、機械館、園芸館、動物館が建てられ、表門の上には大時計が掲げられた。博覧会の趣旨としては、「内地一般農工商諸業を勸奨し、将来各地の物産をして繁殖隆盛ならしむ」とされている⁴⁷。優れた出品物には賞牌(龍紋・鳳紋・花紋)褒状等が授与された。

開拓使(北海道)出品のうち産地が札幌で褒賞を受けたものは主に【表2-2】⁴⁸の通りである。官営事業の製産品が多かったが、中山久蔵の稲も褒状を受けている。また、後に札幌神社の宮司となる白野夏雲は、博覧会の審査員を務め、内務省地理局から出品し褒賞を受けている⁴⁹。

当時の人々の博覧会の認識に関してはどのようなものであったか、観音像を制作した彫刻家高村光雲の『幕末維新懐古談』から紹介する。

「当時、政府の当路の人たちは夙に海外の文明を視察して来ておって、博覧会などの智識も充分研究して来られたものであったが、それらは当局者のほんの少数の人たちだけで、一般人民の智識は、そういうことは一切知らない。」「受けた賞牌は竜紋賞であった。ところが、またその竜紋賞が好いのか悪いのかも師匠は知らない。」とあり、後日評判を知って名誉なものだと理解したと記されている⁵⁰。明治10(1877)年当時、「博覧会」が一般に浸透していなかったことが分かる。

明治14(1881)年に開催された第二回内国勸業博覧会は、第一回よりも出品が増加し、33万点程が出品された。札幌本庁の出品のうち、産地が札幌で褒賞を受けたものは主に【表2-3】⁵¹の通りである。工業局出品の西洋犁と西洋農具類は「精巧且ツ堅牢ナリ」として一等有功賞を、麦酒は「風味醇厚」と評され、三等有功賞を、当時札幌農学校の学生であった宮部金吾採集による植物標本も褒状を受けている。明治23(1890)年の第三回内国勸業博覧会の審査報告においては、北海道の米について「近年試作ノ経験ヲ積テ…其ノ品質殆ト北越奥羽等ノ産ト伯仲セリ」と評され、りんごについては「暖地ヨリハ寒地ニ適ス優品ヲ出セルハ水原寅蔵トス」として水原寅蔵が一等有功賞を受けた。(【図2-4】⁵²に林檎園、右に豊水学校(豊水小学校は平成15年に閉校し、現在は札幌市公文書館・豊水まちづくりセンター・

【表2-2】褒賞一覧(第一回内国勸業博覧会)

褒賞	品名
鳳紋	木製家具、鞆革、犁(馬用)、生糸等
花紋	豚炮腿(ハム)、麻、薫鮭、海藻類標本等
褒状	漁網、麵包(パン)菓子、稲、温麺等

【表2-3】褒賞一覧(第二回内国勸業博覧会)

褒賞	品名
一等有功	西洋犁・西洋農具類
二等有功	琥珀織、綾織、北海道三角測量図、牛・馬・羊、麻等
三等有功	札幌麦酒、琥珀織、綾織、麻等
褒状	木製諸器、麻、漁網、小麦、大豆等



【図2-4】(筆者加筆)



【図2-5】

⁴⁶ エドワード・S・モース、『日本その日その日』、2013年、講談社学術文庫、126-127頁。

⁴⁷ 明治ニュース編纂委員会、『明治ニュース事典第一巻〔慶応4年ー明治10年〕』、1983年(当館所蔵図書、No.13256)、毎日コミュニケーションズ出版部、530頁。

⁴⁸ 前掲『札幌区史』、513頁より作成

⁴⁹ 白野夏雲は「建設石、砥石、硯石、石灰石、土砂蒐集」で龍紋賞を「木材類聚」で花紋賞を受けた。白野仁『白野夏雲』、1984年(当館所蔵図書、No.13508)、北海道出版企画センター、186-187頁。

⁵⁰ 当時高村光雲は東雲師匠の代作で制作しており、名前が表に出ることはなかったという。高村光雲『幕末維新懐古談』1995年、株式会社岩波書店、122-128頁。

⁵¹ 前掲『札幌区史』、514-515頁より作成

⁵² 「札幌市街番地等級入明細図」(1903年、当館所蔵地図、No.7)拡大図

豊水会館の複合施設)が見られる。【図 2-5】⁵³ は林檎園の図)

2.3 札幌の殖産興業について

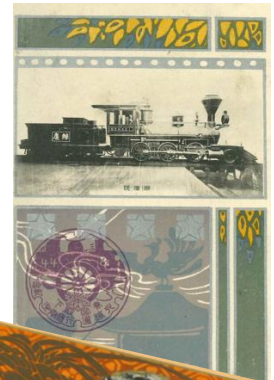
明治時代、海外からの輸入により国内産業が衰退し、政府は「殖産興業」を重要な政策課題とした。国内産業の育成による近代化を目指し、西欧の先進技術導入のため、官営工場の設立や専門技術を持った外国人の雇用などを積極的に進め、輸出の増大を目指していた。明治 5 (1872) 年から 15 (1882) 年に至る「開拓使十年計画⁵⁴」によって、各地に開拓使直営の事業が設立された。40 近い官営工場のうち、製油、麦酒・葡萄酒醸造、製網、製糸など 20 数か所が札幌管内におかれた。【図 2-6】⁵⁵ は明治 14 年の明治天皇巡幸当時の札幌麦酒醸造所全景である。

札幌を中心とした交通整備事業で大きなものは幌内鉄道の建設である。三笠の幌内炭鉱から石炭を運ぶ手段として鉄道建設が始められ、明治 13 (1880) 年、クロフォードにより着工された手宮・札幌間(幌内鉄道の一部)が開通し、アメリカから蒸気機関車【図 2-7】⁵⁶ が輸入された。客車である開拓使号【図 2-8】⁵⁷ は、明治天皇が「開拓使十年計画」の実況を視察するための北海道巡幸に使用されている。開拓使号を含む車両は蒸気機関車がけん引し、8 月 30 日午後 6 時 40 分に手宮を出発し、午後 9 時頃に札幌停車場に着いたという。官吏、札幌農学校の教員生徒など多くの人々が奉迎し、停車場から宿泊所である豊平館⁵⁸ (北 1 条西 1 丁目) まで行列ができ、道の両側に無数の提燈が掲げられ、豊平橋で花火が打ち上げられたという⁵⁹。

この巡幸において明治天皇は工業課の蒸気木挽場、製粉所、紡織所、麦酒醸造所等官営の各工場や札幌農学校、博物場等を視察し、麦酒醸造所のビール、山鼻の水原果樹園のりんごが献上されている。



【図 2-6】札幌麦酒醸造所



上【図 2-7】下【図 2-8】

2.4 明治 39 年北海道物産共進会について

北海道庁は、明治 19 (1886) 年 10 月に函館で、明治 20 年 7 月に札幌で北海道物産共進会を開催し、その後、明治 25 (1892) 年 8 月に 31 日間の日程で札幌の中島遊園地 (現: 中島公園) において行われたものは、出品者 4,323 人、出品点数 1 万 1,222 点、受賞者は 1,661 人で 7 万 1,228 人もの人々が訪れた盛大なものだった。それ以降全道各種の生産品を網羅した共進会は明治 39 (1906) 年まで開催されなかった。

開催の提唱は、明治 37 年に北海道農会第六回総会において、全道農産共進会を札幌で行う提案が発端になった。提案の可決後、出品を一部の農作物のみではなく、各種の生産品を網羅して盛大に全道物産共進会を開くことが計画され、水陸産業に関係のある各種実業団体に諮り、さらに明治 38 (1905) 年の開催予定を 1 年延長して準備を整えた。北海道農会・北水協会・北海道蚕糸協会・北海道畜産協会・北海道林業会・北海道園芸協会の 6 団体が主催になり、専門営業者を勧誘して出品の斡旋や資金の寄付を行った。道庁はこれに対し 1 万円の補助金を出し (予算は一般寄付金が 2 万円、主催団体が 5 千円、雑収入約 7 千円)、会頭は北海

⁵³ 高橋龍太郎『札幌繁栄図録全』、函館銅版所北島社、1887 年 (当館所蔵図書、No.46417)

⁵⁴ 開拓使十年計画は、10 年で総額 1000 万円を支出するという財政的な見通しであって、当初から計画そのものが組織的に立てられていたわけではない。『新北海道史第三巻通説二』、1971 年、北海道、169-170 頁。

⁵⁵ 大日本麦酒株式会社、『札幌ビール六十年記念』1936 年、(当館所蔵図書、No.1044)

⁵⁶ 「明治十四年、天皇陛下御巡幸ノ御召車ヲ索引セン機関車、辨慶號」(1911 年、当館所蔵絵はがき、No.4484)

⁵⁷ 「明治十四年天皇陛下御巡幸ノ際御召車、内面、外面」(1911 年、当館所蔵絵はがき、No.4482)

⁵⁸ 豊平館は貴賓を迎えるホテルとして建築され、明治 14 年に完成。昭和 33 (1958) 年、中島公園に移築。

⁵⁹ 札幌市、『北海道行幸啓誌』、1897 年 (当館所蔵図書、No.2546) 11-19 頁。

道長官園田安賢、副会頭の 1 人は札幌農学校校長で北海道農会長の佐藤昌介が推戴された。

道庁においても官設共進会を開こうとする計画はあったが実行に至らなかった。官の補助はあったが、経費の多くは有志の寄付によるものであり、この共進会は民間主導による開催と位置づけることができる。

右図の「札幌市街明細案内図」【図 2-9】⁶⁰には共進会会場も見られる。裏面には「札幌区内各事業家照会表」として北海タイムス等の新聞社や旅館、今井呉服店等多くの店名が記されている。書店で販売された『札幌土産』【図 2-10】⁶¹は札幌神社や豊平館、農学校等の風景写真集で、どちらも明治 39 年に発行されたもので、北海道物産共進会記念と記されている。

12 回目にあたる北海道物産共進会は、6 団体の共同事業として明治 39 年 9 月 10 日より 30 日までの 21 日間行われることになった。①各地方の特産物を陳列し比較研究して生産者を奨励すること②広く内外の人を招致して特産物を紹介し、本道の進歩を広告することの 2 つを主要な目的として開催された⁶²。

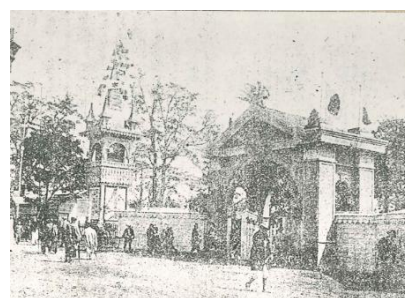
この共進会を成功させるため、札幌を中心とした、全道の有志で協賛会も組織された。協賛会の経費は同会員の寄付金等を充て、庶務係、接待係、売店係、装飾係、余興係等が置かれ、来館者の歓待、構内に売店を設け、府県からの委託品や出品と同一種の物品の販売を行った。来館者に不便がないよう各旅館と協議し改良を図り、旅館の不足を補うため、時計台の楼阁も旅館に充てられた。地方からの団体客（学校生徒等）にも宿泊や賄い等の便宜を図った。人力車や馬車等の料金低減を図り、料金表は旅館各所に掲示し、車体や車夫の服装も改良されたという⁶³。また、来賓に各地の案内記等の印刷物を進呈し、本道の紹介を目的とした懇親会も開かれ、岡田花園において大園遊会も開催された。

共進会の会場は中島遊園地で新築の第一館を最大の建築とし、閉会後も永く本道産業推奨の一機関となることが期待された。第二館は従来の物産陳列場の建物をそのまま充用し、第三館は会期のために新築されたが、一時的な建物として僅かに内外に装飾が加えられた。他に牛馬舎、羊豚舎、式場、景品引換所等合計 28 棟が使用された。園内には前回の共進会の時に栽植した松、桜、榆、水松があり、観覧者のためにベンチ 20 脚が置かれた。園内では毎日時間を定めて奏楽が行われ、開会式、褒賞授賞式、閉会式、園遊会等に楽隊が揃えられた。式日、記念日には打上げ花火の催しもあり、競馬及び自転車の競技会も開かれた。夜間はアークライトが点灯し、広告塔にイルミネーションが施された。会場の詳細について、明治 39 年 9 月 10 日『小樽新聞』の記事「物産共進会」から冒頭部分を紹介する。「正門【図 2-11】⁶⁴は鼠色漆喰にて築き上げ上部中央に金色燦爛たる大の星形を置き右方に入場券売捌所、暴風警報信号標⁶⁵、天気予報揭示場、左方に北海道物産共進会郵便局、諸荷物扱及諸品預り所なる内国通運株式会社札幌支店出張所、各府県の委託販売店、売店等あり…（略）」とある。



【拡大図】

【図 2-9】
(筆者加筆)
左上【図 2-10】



【図 2-11】共進会正門

⁶⁰ 「共進会紀念商号入札幌市街明細案内図」（1906 年、当館所蔵地図、No.8）

⁶¹ 富貴堂、『札幌土産』、1906 年（当館所蔵図書、No.6258）

⁶² 「物産共進会開会」『小樽新聞』明治 39 年 9 月 10 日

⁶³ 「物産共進会協賛会事業」『小樽新聞』明治 39 年 9 月 8 日

⁶⁴ 「物産共進会記事(愈々本日より開会)」『小樽新聞』明治 39 年 9 月 19 日

⁶⁵ 札幌管区気象台、『札幌気象百年史』、1976 年（当館所蔵図書、No.1203）48-49 頁。明治 13 年開拓使本庁では地理課通達をもって暴風信号柱設立が公示され、明治 16 年「暴風信号標式」も定められ、明治 36 年暴風警報を標示したものを「正式警報信号標」とし、測候所構内と道庁の桜上にも設置された。

北海道物産共進会明細図【図 2-12】⁶⁶の拡大図から、記念絵はがきの売店が見られる。明治 37（1904）年頃より絵はがきが流行し、札幌でも北海道を紹介するために盛んに絵はがきが発行された。物産共進会の記念絵はがき【図 2-13】⁶⁷も好評で事前の予約で殆ど売り切れ、一万組を増刷したという。初日は 4,500 枚ほど売れたという⁶⁸。

また、絵はがきに押捺されている共進会記念スタンプと当日限り押印する記念日スタンプの 2 種類【図 2-14】が作成された。記念日スタンプは会期中の記念として、入場者の希望に応じ、案内図、絵はがき、扇子、ハンカチーフ、ネクタイ等に押捺されたという⁶⁹。また、毎週土曜日に記念祝日を設け、記念品付の入場券を販売し福引を行っている。これは第 5 回内国勸業博覧会を参考にしたもので、「射幸心を挑発するやの非難を受け」たが、「由来博覧会、共進会の如きは、半面に於いて祝祭的な意味なきにあらず」としてこの催しを行っている⁷⁰。第一回祝日である 9 月 15 日は 1 万枚の記念品付入場券が売り切れた。この日の入場者総数は（前日が 2,499 人であるのに対して）11,131 人、第二回祝日の 22 日（【図 2-15】⁷¹に特別広告）は 15,998 人、第三回祝日の 29 日は 17,517 人と会期中で最も多かった（最終日の 30 日は入場者総数が 3,595 人で、会期中の合計入場者数は 140,703 人）。

【図 2-16】⁷²は記念品の交付に並ぶ人々の写真であるが、記念日が集客に大きな効果をもたらしていたことが分かる。記念品は、共進会が購入した絵はがきや花簪、記念ナプキン、手帳、石鯨、洋傘、金時計や桐箆笥の他、会社や個人からの寄贈も多く、北海タイムス社からは新聞購読券 30 ヶ月分、今井呉服店からは手拭 300 本等様々なものが用意された。主催団体のひとつ、北水協会は園内に水産製造品の販売店を設け、付属のビヤホールでは無料で試食を提供して好評を博し、製品紹介の目的も果たすことができたという⁷³。

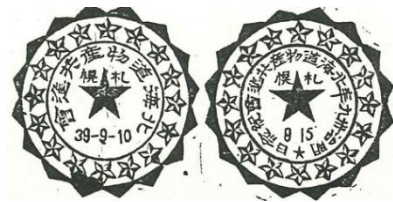
出品数は 1 万 3,225 点（第一部を農業、第二部を畜産業、第三部を林業、第四部を水産業、第五部を鉱業、第六部を工業に分類）、参考品（東京、大阪、京都等各府県の産物）は 2,483 点に及んだ。水産缶詰の中で黒く変色しやすく製造が困難とされた蟹の缶詰も



【図 2-12】 北海道物産共進会明細図
【拡大図】（筆者加筆）



【図 2-13】 記念絵はがき



【図 2-14】 記念スタンプ



【図 2-15】 特別広告



【図 2-16】 記念品の交付

⁶⁶ 札幌市公文書館所蔵特定重要公文書『北海道物産共進会明細図（明治 39 年）』（簿冊コード：2017-0665）

⁶⁷ 「北海道物産共進会記念、第一陳列館、札幌農学校第一農場、石狩海濱の漁撈」（1906 年、当館所蔵絵はがき、No.3717）

⁶⁸ 「共進会彙報」『北海タイムス』明治 39 年 9 月 6 日、「共進会雑観」『小樽新聞』明治 39 年 9 月 11 日

⁶⁹ 「共進会彙報」『北海タイムス』明治 39 年 9 月 8 日

⁷⁰ 北海道物産共進会、『北海道物産共進会事務及審査報告』、1907 年（当館所蔵図書、No.58768）302 頁。

⁷¹ 「特別広告」『小樽新聞』明治 39 年 9 月 21 日

⁷² 前掲『北海道物産共進会事務及審査報告』306 頁左。

⁷³ 北水協会、『北水協会沿革史』、1959 年（当館所蔵図書、No.1095）、60 頁。

出品されている⁷⁴。昆布や塩鮭、乾鮭その他の海産物は買約開始の当日より殆ど全てが買約になり⁷⁵、委託販売店では、秋田の金銀細工、南部鉄瓶が人気だったという⁷⁶。

また、審査については、9月9日から着手され24日で決了されたが、出品数の多さと出品物附属の解説書が出品物と相反するものもあり、審査員は困難と多忙を極めたという。審査報告の詳細は賞状授与式まで伏せられた⁷⁷。賞状授与式は26日に行われ、農商務大臣（代理水産局長）、馬政局長（代理馬政官）⁷⁸、有爵者、両院議員、実業家等、参列者も多かったという。審査の結果は、名誉金牌8点、名誉銀牌27点、一等賞69点、二等賞238点、三等賞590点、褒状1,424点となり、褒賞札は陳列品に貼布され、観覧人の注目を集めた。褒賞として、賞状及び賞牌【図2-17】⁷⁹が授与された。

畜産は「動物類は長足の改良発達をなしたる成績顕著なるを認む」と評され、前田農場の牡牛、琴似村の牝馬（北振号）に名誉金牌が授与されている。工業は「工業中本道特産の麦酒亜麻織物酒精においては既に世の定評あり」と評され、北海道製麻株式会社の亜麻織物、大日本麦酒株式会社の札幌ビール【図2-18】⁸⁰、黒ビールも「本道農工業の発達を助く其の功績偉大なり」として名誉金牌を受賞している。



【図2-17】賞牌

2.5 おわりに

明治初期の博覧会や共進会は農業等産業の育成とその成果を広く伝える場であり、「博覧会及共進会は、産業発達の盛衰を知るの写真機なり」⁸¹との言葉の通りであったように思う。初期に官主導で行われた博覧会、共進会は年月を経て、地域の発展に伴い、明治39年の北海道物産共進会のように、民間の主導でも行われるようになった。この物産共進会では、全道の有志からなる協賛会が大きな役割を果たした。地方委員は、出品を促す勧誘員と連絡を取り、出品の勧誘や寄付金の募集、共進会と各出品人の間に立つ役割を持ち、地方委員を委嘱された上田善七もこの役割を果たしたとみられる。集客のため福引等の余興にも力を入れるようになっているが、福引の景品には個人や会社の寄付も多く見られた。明治政府主催の内国勸業博覧会は明治36年に開催された第5回が最後となったが、それ以降も各府県や団体、企業等主催の規模の大きな博覧会や共進会は開催された。これは地域が発展した証でもある。



【図2-18】酒類の陳列

おわりに

本稿では、2章のそれぞれの担当者が展示パネルで調査した過程の中で、特に興味を持ったことやパネルに表現できなかった部分について再考し、調査を深めることができた。次々頁から札幌市公文書館企画展示『上田家の足跡～特定重要公文書「上田善七資料」』を中心に

⁷⁴ 蟹肉はブリキ缶に詰める際、化学変化を起こし黒く変色しやすかった。明治39年北海道物産共進会では、根室の和泉庄蔵製造による蟹缶詰は「風味色澤共に宜しく殆ど完全」と評され一等賞を、碓氷勝三郎が二等賞を受けている。前掲『北海道物産共進会事務及審査報告』445～447頁、「共進会概観」『北海タイムス』明治39年9月20日

⁷⁵ 「共進会記事」『小樽新聞』明治39年9月22日

⁷⁶ 「共進会彙報」『北海タイムス』明治39年9月16日

⁷⁷ 「共進会記事」『小樽新聞』明治39年9月23日

⁷⁸ 馬政は、馬の改良・繁殖などに関する行政。明治39年の馬政局官制に基づき、内閣総理大臣の管理下に設置された。日本大辞典刊行会、『日本国語大辞典 第十六巻』、1976年(当館所蔵図書、No.1582)、250頁。

⁷⁹ 右の表面上部の北海道共進会の下部に名誉金牌等の等級、中央には日本神話の大国主命を浮彫りにしている。左の裏面は中央に星と光線放射の形を描き、北海道の意味を表し下部に魚や斧、麦穂が見られる。前掲『北海道物産共進会事務及審査報告』156頁、「共進会記事」『小樽新聞』明治39年9月26日

⁸⁰ 前掲『北海道物産共進会事務及審査報告』

⁸¹ 前掲『札幌区史』515頁。

～』で使用した展示パネルを掲載する。主旨パネル、1 章「上田家の来道と発展」は谷中章浩、2 章「地域の発展と上田家」の 1、2 節は得能紗恵、3、4 節は中尾友香、3 章「上田家と教育」は滝友宇貴、4 章「上田家の社会貢献活動」は米田瑞穂が担当した。（すべて当館専門員）

（中尾 友香）

参考文献

円山百年史編纂委員会、『円山百年史』、1977 年（当館所蔵図書、No.3388）
札幌市議会、『第 5・6 期 札幌市会小史』、1980 年（当館所蔵行政資料、No.11284）
札幌市教育委員会、『新札幌市史 第四巻通史四』、1997 年（当館所蔵図書、No.33508）
札幌区役所、『札幌区史』、1911 年（当館所蔵図書、No.19196）
札幌市役所、『札幌市史（産業経済編）』、1958 年（当館所蔵図書、No.769）
北海道、『新北海道史 第三巻通説二』、1971 年（当館所蔵図書、No.762）
北海道物産共進会、『北海道物産共進会事務及審査報告』、1907 年
大蔵省、『開拓使事業報告 第 2 編』、1882 年
内国博覧会事務局、『明治十年内国勸業博覧会審査評語 1』、1877 年
國雄行、『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』、2005 年、岩田書院

参考 URL

国立国会図書館「博覧会 近代技術の展示場」「第 1 部 1900 年までに開催された博覧会」
<https://www.ndl.go.jp/exposition/sl/index.html> （最終閲覧：2026 年 4 月 10 日）
国立公文書館「公文書にみる発明のチカラー明治期の産業技術と発明家たちー」
<https://www.archives.go.jp/exhibition/digital/hatsumeai/contents/category01.html>
（最終閲覧：2026 年 4 月 10 日）